

平成 26 年 5 月 20 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520164

研究課題名(和文)『超マリオネット』論 - 再考 演劇改革、舞踊革命、人形劇ルネサンスの接点

研究課題名(英文) Rethinking the "Ueber-marionette": The Intersection between theater reform, dance revolution and the renaissance of puppetry

研究代表者

山口 庸子 (Yamaguchi, Yoko)

名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授

研究者番号：00273201

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円、(間接経費) 240,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、身体史の観点から、エドワード・ゴードン・クレイグの「超マリオネット」の構想を、演劇改革、舞踊革命、人形劇ルネサンスという三つのパラダイム転換の接点として読み解くことであった。「超マリオネット」の構想に関連する資料の分析から、クレイグの構想が、特に20世紀初頭のドイツ語圏の身体文化や舞踊、人形劇と密接な関連を持つことが明らかになった。研究成果は、学術誌に論文として発表した。また、他の研究テーマと関連する形で、ヴァルター・ベンヤミンにおける人形的身体についての論考も執筆し、共著の論文集として出版することができた。また未公開資料も含む貴重な資料を入手し、今後の研究に生かす予定である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to interpret Edward Gordon Craig's concept of "Ueber-Marionette" as the intersection of theater reform, dance revolution and the renaissance of puppetry, considered from the perspective of the history of the body. It analyzed the especially close connections between this concept and body culture, dance, and puppetry in German speaking countries at the beginning of the 20th century. The results were published as an article in the academic journal "Deutschstudien". In relation to another research topic, one more article about the puppet-like body in the works of Walter Benjamin was included in a collection of essays published in Germany. The valuable materials collected during this research, including Craig's unpublished manuscripts, will form the foundation for future work.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：エドワード・ゴードン・クレイグ 演劇改革 モダンダンス 人形劇 モダニズム 身体文化 身体史
超人形

1. 研究開始当初の背景

申請者(山口)は、1992年以降、ドイツ語圏モダニズムの舞踊と文学の相互的關係を研究し、その成果をまとめた『踊る身体の詩学 モデルネの舞踊表象』(単著、名古屋大学出版会、2006年)は、第5回日本独文学会賞(日本語研究書部門)および2006年度日本ドイツ学会奨励賞を受賞した。この研究を進める過程で、モダニズムにおける舞踊と人形劇が、舞台芸術の多くの局面で接点を持つことに気づいた。本研究の対象であるエドワード・ゴードン・クレイグの『俳優と超マリオネット』(以下『超マリオネット』論)および、操り人形的な俳優を用いた『愛の仮面劇』演出、オスカー・シュレンマーによる『三位一体バレエ』やパウハウスにおける人形劇の試み、表現舞踊家メアリー・ヴィグマンによる、ダンサーと人形を用いた『生の七つの踊り』などがその例である。

20世紀初めから1930年代にかけて、「機械化可能なものはすべて機械化される」(シュレンマー『人間と人工物』)時代において、舞踊と人形劇はともに「見世物」から「芸術」へと再編された新しい芸術であった。両芸術が表象する身体は、危機に瀕した近代的身体に対抗する別の身体モデルとして了解された。大雑把に言えば、舞踊の身体が、日常的身体が失った原始的な生命力に溢れた身体と理解されたのに対し、人形の身体は、ある時はリズムカルに機械化された身体、ある時はその機械化により生命の脆さを露わにする身体の表象となった。身体史的に見れば、このような舞踊の身体と人形の身体への注目、20世紀初頭の社会的・文化的危機に対する、相補的な応答であったと解釈できる。

2. 研究の目的

1. で述べたように、自立した個人としての近代的身体が危機に陥るなかで、別の身体として、舞踊や人形の身体がクローズアップされたと考えられる。だが、舞踊の身体に関する諸研究が1980年代後半から積み重ねられてきたのに対し、人形的身体に関する包括的な研究は未だ現われていない。人造身体をめぐる研究は盛んだが、モダニズムにおける人形劇ルネサンスという視点は、ほぼ完全に欠落しており、また体操など当時の身体文化との関連づけも乏しい。そこで、「世紀転換期の人形的身体」を身体史的視点から検討することで、演劇、舞踊、人形劇、身体文化などの学問領域を超えた新たな学際的研究領域を開拓できると考えた。そのためにはまず、演劇改革の旗手であり、モダニズムにおける人形的身体の原点といえるクレイグの『超マリオネット』論を、演劇改革、舞踊革命、人形劇ルネサンスという三つのパラダイム変換と関連づけて再検討することにした。

クレイグの「超マリオネット」の構想を「世

紀転換期の人形的身体」という身体史的・学際的視点から研究しようとする本研究は、クレイグ研究において、先駆的な意義を持つ。同時に、本研究は、日本でほとんど研究されていない、モダニズムの人形劇ルネサンス研究の嚆矢である。モダニズムの人形的身体には、パウハウスや表現舞踊家による実験のほか、パウル・ブラン、イーヴォ・プフォニー、リヒャルト・テシュナーらの芸術人形劇、パウル・クレイによる人形製作、世界初の長編アニメーション作家ロッテ・ライニガーの影絵人形劇、日本の暗黒舞踏に大きな影響を与えたハンス・ベルメールの球体関節人形など多様な現象形態がある。これらを統一的な観点から研究することは、モダニズムの全貌を捉え直すために大きな意義を持つのみならず、表象文化研究ならびに身体史研究に新しい視点を提供することができる。

3. 研究の方法

本研究では、クレイグの「超マリオネット」の思想を、演劇改革、舞踊革命、人形劇ルネサンス、という三つのパラダイム変換の接点として身体史の観点から再考することとし、以下のような計画を立てた。

I) まず、The Actor and the Übermarionette が収められた Craig, Edward Gordon: On the Art of the Theatre (1905, 1965)、および Rood, Arnold (ed.): Gordon Craig on Movement and Dance (1977) 所収の諸論考を中心に綿密な読解を行い、クレイグの「超マリオネット」の構想及びその身体史的位を明らかにする。

II) 上記 Rood (ed.): Gordon Craig on Movement and Dance. 所収のクレイグの舞踊評論、および関連する研究文献を検討し、「超マリオネット」の構想を共時的な身体文化との関連で考察する。

III) Ribi, Hana; Edward Gordon Craig. Figur und Abstraktion. 等の文献を調査しつつ「超マリオネット」の思想とクレイグの仮面、人形制作、人形劇、木彫人形(版画)との関連を、同時代の人形劇の状況を視野に置きつつ調査する。

4. 研究成果

I) に関して、The Actor and the Übermarionette を含む Craig, Edward Gordon: On the Art of the Theatre(1905)を中心に「人間」「生命」「機械」「死」などをキーワードとして読解を行った。併せて Grund, Uta: Zwischen den Künsten. Edward Gordon Craig und das Bildertheater um 1900 (2004)等の文献を検討した。その過程で、自然主義的舞台に対する反モデルとしてのバロック演劇や象徴主義演劇の重要性、フックス、カンディンスキー、シュレンマー、ピスカートアなど同時代の演劇との共通点・相違点、ロマン派のクライスの人形劇論との接点が明らかになって

きた。また、20世紀初頭のドイツ語圏において、「マリオネット劇のルネサンス」に関して、賛否両論の立場から活発な議論が行われていること、またその際にクライストの人形劇論が参照点として重要な役割を担っていたことが、同時代資料の調査から明らかになった。

人形劇に資料の収集に関しては、大阪大谷大学にある「ゴードン・クレイグ・コレクション」の資料調査を行い、貴重な文献を入手した。クレイグの人形劇への傾倒は一時的なものではなく、当初から演劇・人形劇・ダンスを一体のものとして考えていたこと、また模型舞台用のフィギュアとの関連等もわかってきた。

II)に関しては、「超マリオネット」の構想を共時的な身体文化との関連で考察し、引き続き、クレイグ、シュレンマー、人形劇等に関する文献やDVDを収集した。また当初予定していた日本近代文学館以外に、国立国会図書館でも調査を行い、貴重な文献を入手することができた。各資料の調査結果から、「超マリオネット」の構想が胚胎したのは、クレイグのドイツ語圏滞在の時期であり、そこにハリー・ケスラー伯を中心とした芸術家のネットワークが深く関わっていることがわかってきた。ケスラーは、クレイグをフラァーやダンカンによるモダンダンスと同時体的な現象であると考えており、クレイグを身体史的な観点から考察する観点の正当性を根拠づけることができた。またクレイグが、ケスラーの支持のもとでドレスデンで計画していた「超マリオネット劇場」に関する一次資料を入手することができたことで、そこからクレイグの「超マリオネット」の構想の詳細について、発表論文の中で論じることが可能になった。

III)に関しては、クレイグによる人形劇を再評価が、モダニズムの人形劇ルネサンスに果たした役割が明らかになってきた。具体的には、クレイグと個人的な繋がりがあった、人形遣いのイーヴォ・プフォニー、およびクレイグによるチューリヒのマリオネット劇場への影響について調査し、スイスのマリオネット劇場に関しては、一部を論文の中で触れることができた。

もう一つの重要な発見は、この「超マリオネット」の構想およびクレイグの人形劇との、日本の伝統芸能が意外なほど深く関わっていると思われることであり、この点に関しては、今後も研究を進めて行く予定である。

以上 I) II) III) の成果をまとめ、『超マリオネット』の系譜 - 身体史から見たエドワード・ゴードン・クレイグの演劇改革とドイツ語圏の芸術人形劇』としてドイツ学会の学術誌『ドイツ研究』に論文として発表した。

この論文では、機械化・規律化・抽象化された身体を希求するドイツ語圏の新しい身

体文化を背景として、クレイグの「超マリオネット」の概念と、演劇改革・舞踊革命及び「人形劇ルネサンス」に密接な関連があることを明らかにした。また、ダンカン、フラァー、カンディンスキー、シュレンマー、メイエルホリド、ピスカートル、およびメンゼンディーク体操など同時代の身体文化との関係を幅広く論じた。また、クレイグの影響を強く受けた建築家のアルフレート・アルトヘアと、彼が主導したチューリヒにおける国際演劇展及び、チューリヒ・マリオネット劇場に關しても言及した。

さらに、予定外ではあるが、他の研究テーマ(「同時性」と関連する形で、ヴァルター・ベンヤミンの人的身体についての論考

"Puppen, Wachsfiguren, Micky-Maus: Räume der leblosen Leiber als Denkbilder der Simultaneität im Werk von Walter Benjamin"を執筆し、共著の形でドイツで出版することができた。この論文を通して、バロック劇の影響、時間の空間化/空間の時間化、身体オブジェクト化、など、ベンヤミンとクレイグに共通する幾つかの主題が明らかになり、今後の研究に生かす予定である。

これらの研究によって、1)モダニズムにおける人形的身体への注目には、資本主義社会の発達による「人間」像の不安定化、および機械化・規律化・抽象化された身体を希求する新しい身体文化という歴史的・社会的・文化的な背景があること、それゆえ2)モダニズムの演劇改革・舞踊革命・人形劇ルネサンスは密接な関連を持つこと、3)クレイグが、人形劇を再評価したことが、モダニズムの人形劇ルネサンスに大きな役割を果たしたことが明らかになった。

しかしながら、クレイグの人形劇に対する貢献の全体像、およびモダニズムの人形劇については、まだわからないことが多い。この点に関しては、平成24年度から平成26年度にかけての新たな科学研究費補助金による研究「モダニズムの人形劇ルネサンス - ドイツ語圏を中心に」(研究代表者: 山口庸子、基盤C)において、今後も研究を進めて行く予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

山口庸子 「超マリオネット」の系譜 - 身体史から見たエドワード・ゴードン・クレイグの演劇改革とドイツ語圏の芸術人形劇, ドイツ研究 48号 (頁: 88-103), 2014年

〔図書〕(計 1件)

Yamaguchi, Yoko: Puppen, Wachsfiguren, Micky-Maus: Räume der leblosen Leiber

als Denkbilder der Simultaneität im
Werk von Walter Benjamin. In: Ivanovic,
Christine/ Keiko Hamazaki (Hrsg.):
Simultaneität-Übersetzen. Tübingen
(Stauffenburg) 2013, 279S, 199-212.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

山口庸子 (Yamaguchi Yoko)

研究者番号 : 273201

(2)研究分担者

なし ()

研究者番号 :

(3)連携研究者

なし ()

研究者番号 :